武蔵野幕屋 日曜聖書講筵

わが心腸よ
――エレミヤ記第４章――

１９７３年３月３日
小池辰雄

帰入は祈入　汝活くれば我は活くる　心田を新たに耕せ　わが心腸よ　神の審判　愛・怨・仁・大悲　「宗教と教育」

【エレミヤ４】

1 エホバいいたもう イスラエルよ 汝もし帰らば我に帰れ 汝もし憎むべき者を我前より除かば流蕩わじ 2 かつ汝は真実と正直と公義とをもてエホバは活くと誓わん さらば万国の民は彼によりて福祉をうけ 彼によりて誇るべし

3 エホバ、ユダとエルサレムの人々にかくいい給う 汝等の新田を耕せ 荊棘の中に種くなかれ 4 ユダの人々とエルサレムに住める者よ 汝等みずから割礼をおこないてエホバに属き おのれの心の前の皮を去れ 然らざれば汝等の悪行のためわが怒火の如くに発して燃えんこれを滅すものなかるべし

5 汝等ユダに告げ エルサレムに示していえ 笳を国の中に吹けと また大声に呼ばわりていえ 汝等あつまれ 我儕堅き邑にゆくべしと 6 シオンに指示す合図の旗をたてよ 逃げよ 留まる勿れ そは我北より災とおおいなる敗壊をきたらすればなり 7 獅子は其森よりいでて上り 国々を滅ぼすものは進みきたる 彼汝の国を荒さんとて既にその処よりいでたり 汝の諸邑は滅ぼされて住む者なきに至らん 8 この故に汝等麻の衣を身にまといて悲しみ哭け そはエホバの烈しき怒いまだ我儕を離れざればなり 9 エホバいいたまいけるは その日王と牧伯等はその心をうしない 祭司は驚き 預言者は異むべし

10 我いいけるは 嗚呼主エホバよ 汝はまことに此民とエルサレムを大にあざむきたもう すなわち汝はなんじら安かるべしと云い給いしに剣命にまでおよべり

11 その時この民とエルサレムにいうものあらん 熱き風曠野の童山よりわが民の女にふききたると 此は簸るためにあらず 潔むる為にもあらざるなり 12 これよりも猶はげしき風われより来らん 今我かれらに鞫を示さん 13 みよ 彼は雲のごとく上りきたらん 其車は颶風のごとくにして その馬は鷹よりも疾し 嗚呼われらは禍なるかな 我儕滅ぼさるべし 14 エルサレムよ 汝の心の悪をあ

らい潔めよ 然ばすくわれん 汝の悪き念いつまで汝のうちにあるや 15ダンより告ぐる声あり エフライムの山より 災 を知らするなり 16汝ら国々の民に告げ またエルサレムに知らせよ 攻めかこむ者遠き国より来り ユダの諸邑にむかいて其声を揚ぐと 17彼らは田圃をまもる者のごとくにこれを囲む こは我に従わざりしに由るとエホバいい給う 18汝の途と汝の行いこれを汝に招けり これは汝の悪なり 誠に苦くして汝の心におよぶ

19嗚呼 わが腸よ 我腸よ 痛苦心の底におよび わが心胸とどろく われ黙しがたし 我霊魂よ 汝 笳 の声と軍の鬨をきくなり 20敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒され わが幕屋は頃刻にやぶられ 我幕は忽ち破られたり 21我が旗をみ 笳 の声をきくは何時までぞや 22それ我民は愚にして我を識らず 拙き子等にして暁ることなし 彼らは悪を行うに智けれども善を行うことを知らず

23われ地を見るに形なくして空くあり 天を仰ぐに其処に光なし 24我山を見るに皆震え また諸の丘も動けり 25我見るに人あることなし 天空の鳥も皆飛びされり 26我みるに肥美なる地は沙漠となり 且その諸の邑はエホバの前にその烈しき怒の前に毀たれたり

27そはエホバかくいいたまえり すべて此地は荒地とならん されど我ことごとくは之を滅ぼさじ 28故に地は皆哀しみ 上なる天は暗くならん 我すでに之をいい 且これを定めて悔いず また之をなす事を止めざればなり 29邑の人みな騎兵と射者の咄喊のために逃げて叢林にいり 又岩の上に升れり 邑はみな棄てられて其処に住む人なし 30滅ぼされたる者よ 汝何をなさんとするや 設令汝くれないの衣をき 金の飾物をもて身を粧い 目をぬりて大きくするとも 汝が身を粧うはいたずらなり 汝の恋人らは汝をいやしめ 汝のいのちを索むるなり 31われ子をうむ婦のごとき声 首子をうむ者の苦しむがごとき声を聞く 是れシオンの女の声なり かれ自ら歎き 手をのべていう 嗚呼われは禍なるかな 我霊魂殺す者のために疲れはてぬ

●帰入は祈入

1エホバいいたもう イスラエルよ 汝もし帰らば我に帰れ 汝もし憎むべき者を

偶像のことです。

我前より除かば流蕩わじ 2かつ汝は真実と正直と公義とをもてエホバは活くと誓わん さらば万国の民は彼によりて福祉をうけ 彼によりて誇るべし

3エホバ、ユダとエルサレムの人々にかくいい給う 汝等の新田を耕せ 荊棘の中に種くなかれ 4ユダの人々とエルサレムに住める者よ 汝等みずから割礼

をおこないてエホバに属き おのれの心の前の皮を去れ 然らざれば汝等の悪行のために わが怒火の如くに発して燃えん これを滅すものなかるべし

この辺はずっと詩文になっている。一番先に、

「もし帰らんとせば、イスラエルよ」

という言葉の配置です。「帰る」という言葉は「シューブ」という言葉で、これは旧約で非常に大事な言葉の一つです。しばしば、預言者がこの「帰る」という言葉を使っているわけです。ドイツ語でいうと「ケーレン」(kehren)、「向く」という字です。

「もし向こうと思うならば、エホバに向け、神に向け」

と。ここのところは「我に向かえ」という。「顔をこっちに向けろ」というわけです。

「我に向かって帰れ」

と。文章の出だしのこの第1節は、非常に力強い節です。これをひとつしっかり胸にきざんでおいても、人生は歩けるというようなものです。「帰れ」という言葉をルッターは非常に力強く

「自分をこっちに向けろ」

という。日本語の「帰る」という言葉はなかなか味のある言葉ですね、我々としては、「向く」というよりもむしろ「帰る」という方がなお、ある親しみをもった言葉のような気がします。

「帰り来よ、方向をこっちに向けろ」

と。別な方に向くことを「背く」というので、同じ言葉が、この「帰る」という言葉と「背く」という言葉に同じ言葉が使っているところがまたおもしろい。

「何々からあっちの方を向く」

というときには「背く」という言葉になる。「何々へ向く」というときには「帰る」という言葉になるわけです。

それで、「帰る」をもうひとつ日本語で力強く漢文的にいうならば、

「帰入せよ、帰り入れ」

ということ。帰って途中でやめたらダメなんで、入って来なくてはいかん。しかし、魂の世界で帰るとはどういうことかというと、これは

「祈入する、祈り入る」

ことになる。「帰入」は「祈入」に通ずる。これは非常に大事なことです。祈り入ること。「いのる」は「のる」とも言いますけれども。本当に祈り入るときに、帰るということが――ただ頭で思われて帰るくらいな気分的な帰るでは本当の帰るにならない――本当の帰るのは、神さまに帰るのは、どうしても祈りの世界で平伏し帰る。そこで初めてこの「帰る」ということが現実になるわけです。神さまが、

「イスラエルよ、汝もし帰らんとするならば、向かんとするならば――人の方を向くのではない――こっちを向け」

「目を天界にやれ。心を天に向けよ」

と。どうぞ、エレミヤ記第4章1節はしっかりと肝に銘じていてください。

「帰らんとするならば我に帰れ」

と。我々にとって「我」はもちろんキリストであります。キリストの所に帰入（祈入）していく。これは無条件に受けとらなくては。

「どんなことをした。どうであった。自分が今どうである」

なんていうことも一切、要らん。無条件というのは本当に無条件なんです。一切の条件ぬき。宗教の世界はすべて本ものになると、「無条件」とか「絶対」とかいうことになる。無限無量。要するに、「無」という字がこの上に付くんだな、不思議なことに。無条件、絶対。絶対の「絶」は「無」に通じますからね。相対界を絶するんだから。絶言絶慮だとかね。

無条件、無限無量。私はこういうことを言っていると、もう本当にまたちょっと異言が出そうになるくらいに満ちてくる。

「そんな相対的にどうのこうの言われるような人間では、小池はないぞ」

と。人間の評価を絶したところの何ものかである。それはこの無条件の世界にこの魂は生きているから。

「イスラエルよ、汝もし帰らんとせば、我に帰れ。私は無条件にお前を受けとるぞ」

と。人間はなかなか無条件に受けとってくれないんだな。ところが、このキリストは無条件に受けとってくださるから、そこでこちらがまた凄いことになる。しかも、こちらを帰らしめる力を持っている。帰らしめるんです。帰るから帰れるのではない。「帰れよ」といっても、なかなか帰れないでもうぶっ倒れる。そのときには、

「本願の劫力」

がやってくる。本願力というやつ。「本願力」という、今日は「力」の字が付いてきた。今まで「本願」と言っていましたから。本願というのは力があるから本願という。ただ願望くらいな願ではないんだ。この本願力が来ますので、もうこちらの「信仰」とか、「実存」の状態の一切にかかわらない。もうたまらんです、本当に。

これが、この

「エホバ言いたもう。主は、キリストは言い給う。汝、帰らんとするならば、我に帰りきたれ」

と。もうあなた方の中にもの凄いものが来ていなくてはダメだよ。

●汝活くれば我は活くる

汝もし憎むべき者を我前より除かば流蕩（さまよ）わじ

汝と我の関係の中にはそんな偶像なんか入る余地がないと。

[2]かつ汝は真実（まこと）と正直（なおき）と公義（ただしき）とをもてエホバは活くと誓わん

非常に力強い言葉です。「真実（まこと）」「エメツ」というのは「アーメン」という字の元の字です。ギリシヤ語の「アレテイヤ」「真理」です。真実、真理、まこと。それから「ミシュパーツ」「さばき」という字、「シャーファット」「公平」という字。「正直（なおき）」と訳してありますが公正なことです。それから、「セデカー」という、あるいは「セデック」と言いますが、「義」です。これは旧約で一番力強いそういった義の角度の言葉です、みんな。

「エメツ（真実（まこと））とミシュパーツ（正直（なおき））とセデカー（公義（ただしき））をもって誓わん」

と。「誓うがいいぞ」と、むしろ「誓うべきである」とか、そういったような気持です。

「エホバは活くと誓わん」

「活く」という言葉は、「ハイ」という。

「ハイ　ヤーヴェー」

「ch」の「h」だから強いんです。「ハイ」といったら「活きる」こと。「ハイ　ヤーヴェー」といったら、

「神は活き給う」

ということ。この「活くる」という字は「ハーヤー」という字からくる。これは「存在する」という字。だから、「レーベン」（leben 生きる）という字と「ザイン」（sein 在る）という字が非常に似ている。「リブ」（live）と「ビー」（be）。「生きる」ことと「存在する」ことが――「生存」という言葉もあるけれども、存とか、在とか――

「我は実存者」

というのはこっちからきているんだ。「ヤーヴェー」というのは「ハーヤー」から来ている。むしろ、「ハッヤー」からきて、こっちの方が面白いんだけれどもね、本当は。「神は活くるもの」という。だから、こっちは「活く」、「ヤーヴェーは活く」という。

「汝活くれば、我は活くるなり」

と。「我思うゆえに我あり」ではないんだよ。

「汝活く、されば我在り」

ということ。もう、人間の作りだした思想なんてものは大したことはないですからね。デカルトなんていったって、ちょっとでかしたくらいなもんです。何といったって、聖書から出てくるところの真理の世界は上からきている力ある生命の言葉ですから。世界の歴史を動かしているものはやっぱりキリスト教と仏教なんですよ。もう偉大な宗教は底力をなしている、何といっても。ですから、もう聖書一巻であります。

「ヤーヴェーは活く、ゆえに我は活く」

ということはもう言わなくても分かっている。「汝、活きたもう」と言うときには、「ヤーヴェー」ではいかんですよ、三人称になるから。「ハイ　ヤーヴェー」ではない。

「ハイ　アッター」「汝活きたもう」

と言う。そうすると、こっちは活きる。

それはもう、親しい人間関係でもみんなそうです。対者の存在がこちらを活かす。

●心田を新たに耕せ

3 エホバ、ユダとエルサレムの人々にかくいい給う 汝等の新田を耕せ 荊棘の中に種くなかれ

これはちょっと比喩的に言っている。それは具体的にそういうことも、荒れたあとだから、具体的な背景をもって言っているのでしょうけれども、

「汝等の新田を耕せ」

と。あなた方はそれを聞いてすぐ何か思わないかい。「心田」と書けばいいんだよ、心の田と。

「心田を、心の田を耕しなさい」

と。私は直ぐそうくるんだがね。

「新しいってどういうことですか？」

なんて、そうではない。それは「新しい」に相違ないんだけれども、ここでは文字面ではけれども、心の田を耕しなさいということ。

「ユダ、エルサレムの人々の心の田を新たに耕せ」

と。「新」はむしろ副詞になるわけだ。「新たに耕せ」ということです。

田を新たに耕せ。田とは何ぞや。心田なりと。心の田である。まぁこんな解釈をするやつはいるかね、これ。そういう心田を耕す。

こわばっていたらダメですよ――まぁどうも堅い人があるね――柔軟心です。あのイエスの譬話にもある。

「固き地に落ちた種は根が生えない。善き地に落ちた種はよく育つ」

と。というのは、「善き地」というのは耕された、柔らかい、砕けた心。そういう「心の田を新たに耕せ」というわけです。

荊棘の中に種くなかれ

「荊棘」というのは比喩的にいうと、やはり偶像のことです。

「偶像礼拝のような、そんな心の中に蒔いたってしょうがないぞ」

というわけです。

4 ユダの人々とエルサレムに住める者よ 汝等みずから割礼をおこないてエホバに属き

この場合、エレミヤは「割礼をおこない」というときに、いきなりそう言いましたけれども、これはエレミヤは決していわゆる割礼をしようなんて言っているのではない。これは心の割礼のことを言っている。そのあとにすぐ書いてある。

おのれの心の前の皮を去れ

と。イスラエルの割礼というのは男性のあれを切ることなんだけれども。「心の前の皮」、要

するに「心を裂け」ということ。「心を裂く」という言葉はヨエル書に出てくる。

「汝らの心を裂きて、我に帰れ」

〔13汝ら衣を裂かずして心を裂き汝等の神エホバに帰るべし」（ヨエル２・13）

という。ヨエル書の2章に出ている。

「汝等みずから心の割礼をおこなってヤーヴェーにつけ」

「心を砕いてヤーヴェーに帰れ」

と同じことです。傲慢な心ではヤーヴェーに帰れない。神さまを拝する時はみんな平伏しです。平伏しか、本当に朝顔のように天を向いて――どっちでもいいです――そういうようにして帰る。

この4章は「心」という言葉がチョコチョコ出てくる。だから、今日は題に「わが心腸（しんちょう）よ」と書いたわけです。エレミヤは心の、ハートの預言者ですから。イザヤは霊、ガイスト（Geist 霊）。エレミヤはヘルツ（Herz 心）、ゲミュート（gemüt 心情）、一番深い人間性をもった預言者です。内村先生も藤井先生もエレミヤは好きだったね。特に藤井先生はそうだった。あの「エレミヤ」という一文は素晴らしい。

けれども、無教会の先生方は――内村先生はかなり霊的な人だからね、もちろん藤井先生だってそうですよ、だけれども――イザヤ書のガイストの、霊の世界のもの凄い高次なところにはあまり親しみを感じなかったかも知れない。それはやはり使徒行伝に親しみを感じられなかったと同じように――こないだ私もちょっと書いたけれども――やはり結局、問題は聖霊の問題なんです。御霊のこと。

エレミヤのその心は非常に深い。

「心を裂いて来れ。そしたら、悪しき行いが自ずから止まる。そうでなかったら、怒りは火のごとくに発して燃えん」

と。彼は情熱家ですから。

然らざれば汝等の悪行（あしきおこない）のためわが怒火（いかり）の如くに発して燃えん これを滅（け）すものなかるべし

「神の怒りは火のごとく燃える」

と、また烈しいことも言っている。ヒルティなんてのは非常に紳士のような立派なクリスチャンだけれども、ヒルティさんもこんな烈しいことを言うかなんていう言葉も時々ある。

●わが心腸よ

5汝等ユダに告げ エルサレムに示していえ 笳（らっぱ）を

「角笛」は「ショーパール」という字ですが、

国の中に吹けと また大声に呼ばわりていえ 汝等あつまれ 我儕（われら）堅き邑（まち）にゆくべしと

なぜ「城壁がある邑々」と言うか。これは堅固な、敵が攻めてもなかなか陥落しないという意味です。あのスクテヤという剽悍な蛮族が北から攻めて来たでしょ。そのことを既にエレミヤは知っていた。だから、預言しているわけです。そういう堅牢な所へ行けと。スクテヤ人がやって来るからね。

7 **獅子は**

これはみんなスクテヤのことです。

其森よりいでて上り 国々を滅ぼすものは進みきたる

このスクテヤという蛮族は紀元前630年あたりから約ワンジェネレーション〔30年間〕、中央アジアを相当、蹂躙した。これは歴史的に事実です。

彼汝の国を荒さんとて既にその処よりいでたり 汝の諸邑は滅ぼされて住む者なきに至らん 8 **この故に汝等麻の衣を身にまといて悲しみ哭け そはエホバの烈しき怒りいまだ我儕を離れざればなり** 9 **エホバいいたまいけるは その日**

北からの禍いの日、

王と牧伯等はその心をうしない

ここにも「心」という言葉が出てくるでしょ。

祭司は驚き 預言者は異むべし

みんなもううろたえてしまうというわけだ、平安がなくなってしまうと。

10 **我いいけるは 嗚呼主エホバよ 汝はまことに此民とエルサレムを大にあざむきたもう すなわち汝はなんじら安かるべしと云い給いしに剣命にまでおよべり**

いきなりここのところでこういうように、

「我いいけるは嗚呼主エホバよ云々、というのはここに入ってくる言葉ではないのではないか」

というようなことを学者も言うわけです。むしろエレミヤは神さまの怒りを預言して、

「早く外敵から心を改めて逃れよ」

と言うわけなので、ちょっと辻褄が合わないような気もしますけれども。それで学者がそんなことを言っている。

11 **その時この民とエルサレムにいうものあらん 熱き風曠野の童山よりわが民の女にふききたると**

「わが民の女」というような言い方をよくエレミヤはやる。ただ「女」のことを言っているのではないので、「わが民」ということを「わが民の女」というような言い方をする。

此は簸る

穀物を簸ることですね。

ためにあらず 潔むる為にもあらざるなり 12 **これよりも猶はげしき風われより来らん**

神さまの烈しい風がやって来る。その烈しい風の手先になるものはスクテヤであると。

今我かれらに鞫を示さん 13 **みよ 彼は雲のごとく上りきたらん 其車は颶風のごとくにして その馬は鷹よりも疾し 嗚呼われらは禍なるかな 我儕滅ぼさるべし**〔**そは我ら滅ぼさるべければなり**〕

だいぶ私は日本語の訳も変えて読んでいるんですよ。

14 **エルサレムよ 汝の心の悪をあらい潔めよ**

ここにも「汝の心の悪をあらい潔めよ」と。

然ばすくわれん 汝の悪き念いつまで汝のうちにあるや

「心」と「念」がちゃんと対句になっている。要するに、一切の問題は心の問題に帰するんです、人間の側は。

15 **ダンより告ぐる声あり エフライムの山より災を知らするなり** 16 **汝ら国々の民に告げ またエルサレムに知らせよ 攻めかこむ者遠き国より来り ユダの諸邑にむかいて其声を揚ぐと** 17 **彼らは田圃をまもる者のごとくにこれを囲むこは我に従わざりしに由るとエホバいい給う** 18 **汝の途と汝の行いこれを汝に招けりこれは汝の悪なり 誠に苦くして汝の心におよぶ**

ここにも「心」とある。18節で言うとおり、なぜそうなるかというと、結局、汝のその心から発する悪の行いが招いたので、自業自得であると。まぁそういうように、非常にエレミヤはイスラエルの、エルサレムのやがてくる滅びを言う。

「エレミヤ哀歌」は必ずしもエレミヤが書いたわけでは学問的にはないけれども、しかし、エレミヤと確かに心の非常に通った、あるいはエレミヤの弟子が書いたのではないかと思われます。ひょっとしたら、エレミヤがその基になっているかもしれない。私はあの「エレミヤ哀歌」は非常に前にも感動して読んだので、自分で訳して註解もつけた。

19 **嗚呼 わが腸よ 我腸よ 痛苦心の底におよび**

非常に著しい節です、ここは。

わが心胸とどろく われ黙しがたし 我霊魂よ 汝笳の声と軍の鬨をきくなり 20 **敗滅に敗滅のしらせありこの地は皆荒され わが幕屋は頃刻にやぶられ 我幕は忽ち破られたり** 21 **我が旗をみ 笳の声をきくは何時までぞや** 22 **それ我民は愚にして我を識らず 拙き子等にして暁ることなし 彼らは悪を行うに智けれども善を行うことを知らず**

23 **われ地を見るに形なくして空くあり 天を仰ぐに其処に光なし** 24 **我山を見るに皆震え また諸の丘も動けり**

ここのところはみな詩ですよ、ヘブライ語は。

25我見るに人あることなし 天空(そら)の鳥も皆飛びされり 26我みるに肥美(ゆたか)なる地は
沙漠(あれち)となり 且その諸の邑はエホバの前にその烈しき怒の前に毀(こぼ)たれたり
27そはエホバかくいいたまえり すべて此地は荒地とならん されど我ことごとくは之を滅ぼさじ

ここのところはまたちょっと別になりますが。

28故に地は皆哀(かな)しみ 上なる天は暗くならん 我すでに之をいい 且これを定めて
悔いず また之をなす事を止(や)めざればなり

「我ことごとくは之を滅ぼさじ」というのは、おそらく後から編入された言葉で、本来はなかったと、まぁそれは学者の想像のとおりでしょう、おそらく。

19嗚呼 わが腸(はらわた)よ 我腸(わが)よ

「メーアイ、メーアイ」という妙な字です。「メーアッハ」というんです、「腸」という字は。五臓六腑というやつ。この五臓六腑がこの「メーアッハ」です。非常に深い言葉です。ここに「心腸」と書きましたが、「心」の字はなくてもいいが、エレミヤは非常に心の預言者だから、「心」の字をつけた。

「わが心腸を見たもう万軍のエホバよ」

という言葉があとの方に出てくるけれども。はらわた、はら。「腹が坐っている」なんて言うでしょ、「胸が坐っている」とは言わない。「丹田に力を入れよ」なんてね、腹が大事です、非常に。「心」の方は心臓の方だから上だね。だから、「心腸」でもって――「腸」は腹わた――これで内臓の全部大事なところ。そして心の深い世界。ゲミュート（gemüt 心情）、ゲフュール（gefühl 感情）、情感の深いところ。

19嗚呼 わが腸(はらわた)よ 我腸(わが)よ 痛苦(いたみ)心の底におよび

「心の底」というのは、口語訳では「心臓の壁」とある。「壁」という字で両壁なんです。「痛みが心臓の両壁に及び」という。本当は、「心臓の両壁が痛む」という動詞になっています。

わが心胸(むね)とどろく

口語訳では「わが心臓がはげしく鼓動する」という。「とどろく」の方が言葉としてはいいよな。わが胸がとどろいている。「はげしく鼓動する」というのは科学的な言い方。とにかく非常に、表現することのできないような事態を、実に大したもんです、この表現は。「わが腸よ、腸よ」と。心臓の壁がとどろいたという。

ダンテが、

「血の一滴も震わざるなし」

なんていうことを言ったけれども、そういうような非常に感激してね。これはなぜ、こんなに彼は深刻に、「腸が痛み動きとどろいた」か。これは、滅びの現実が黙示されている。

●神の審判

23**われ地を見るに形なくして空くあり**

という23節から26節まで、天地創造の前のような混沌たる状態。鳥もいない。空の鳥も飛び去ってしまう。山を見るに云々といって、非常なノストラダムスの預言の最後みたいなこと。正直、北イスラエル・南ユダはアッシリヤとバビロニヤにやっつけられて、もう荒廃そのもの。エレミヤ哀歌に言われているような事態になってしまった。

われ黙しがたし我霊魂よ

この「霊魂」という字は「ネフェシュ」という字で、「われ自身」なんていうときにも使う言葉です。「霊魂」の「魂」の方に当たる。「霊」は「ルーアッハ」。

汝笳の声と軍の鬨をきくなり20**敗滅に敗滅のしらせあり**

この「敗滅に敗滅の」という言い方も非常に強い畳みかけた言い方をしている。滅びに滅びのしらせがある。そして、

この地は皆荒され わが幕屋は頃刻にやぶられ 我幕は忽ち破られたり

「幕屋」は、もちろんテントを張ったテント生活をしていたそのテント住まいですよ。「オーヘール」という字です。幕屋が破られてしまう。

1**我が旗をみ 笳の声をきくは何時までぞや**22**それ我民は愚にして我を識らず**

この場合の「我」はもちろん神さまですよ。ヤーヴェーを知らないという。

拙き子等にして

「拙き子等」というのは、口語訳では「愚鈍な子供」。にぶいとか、まぬけとかいう。

暁ることなし 彼らは悪を行うに智けれども善を行うことを知らず

ローマ書のところと似ているね。北からの禍いが恐ろしいわけで、しかし、直接にはスクテヤが来たわけではない。けれども、スクテヤの禍というのは全地域に及んで、間接にそれがきっかけになって、アッシリヤやバビロニヤが動いているわけです。

エレミヤは世の終末、イスラエルの終末を既に預言して、23節から、

23**われ地を見るに形なくして空くあり**

云々と。非常に描写が簡単な2、3節ですけれども、何とも言えない描写ですね。こういうのは想像しているのではもちろんない。「我見るに」というのは、本当にそのように示されている。……時々、何か示しのような夢を見るけれどもね。祈りの世界でこれはエレミヤが見ているわけです。

25**我見るに人あることなし 天空の鳥も皆飛びされり**

というんだから。

26**我みるに肥美なる地は沙漠となり 且その諸の邑はエホバの前にその烈しき怒りの前に毀たれたり**

と。神さまの審判です。まぁ今の日本を見ていると――相対的な善悪ではない――神を畏

れるところから始まらなくては。

私は高等学校でも中学校でも、西郷南洲の

「敬天愛人」

というモットーを掲げている。「愛人」はもちろん友情の世界です。「友を愛する」とは、本当に友人のために助けになるような人となれということ。ただ感情的に愛するというのではない。

「天」という言葉は素晴らしい言葉だね。聖書の中でも神さまの代わりに「天」という言い方をしているところがあるけれども、東西に通じて霊界の実在者を直接に指さないで、その霊界の実在者の在る場所を「天」という。場所を指すことによって実体を指しているわけです。そういう表現が一番本当は深い。

ミケランジェロも、神さまを鬚の生えた爺さんに描いてしまったから間違えた。素晴らしい絵だけれども、あれは描かない方がよかった。父なる神は、光だけにしておけばよかった。その光の奥の空間を描かなくては。そこは東洋の絵がいいところだ。空間、ここの所に何があるかわからん。これを描いたらいかん。限定すべからざるものは描いてはいかん。限定すべからざるものは表現できない。ダンテも終わりのところでちょっとそういうことを言っているところがある。

「表現してしまったらいかん」

と。そこらを心得ていたのはやっぱりゲーテだね。

「一番大事なことは言うな」

と。だから、『ファウスト』の第二部の一番終わりで、

「永遠に女性的なるもの我らを引き上ぐ」

といって、どこへ引き上げるかを言わないんだ、彼は。そこで私が付け加えたけれども、あれは少し悪かったね（笑）。

「愛と歓喜をもって神聖なる太陽に向かって」

と、私が書いてやった。「ゾンネ」（Sonne太陽）で始まっているから、後を「ゾンネ」で終えてやったんだ。これは素晴らしいことなんだ、本当は。ゲーテさんも非常にびっくりしていると思う。けれども、

「それは書かない方がよかったんだよ」

なんて言っているかもしれない（笑）。しかし、「聖なる太陽へ」と、あれはやっぱり書いた方がよさそうだったな。ゲーテも「しまった」なんて思っているだろう。まぁいろんなことに私の話は飛びますけれども。

「天地は過ぎゆかん。されども我が言葉は過ぎゆくことなし」

と。今の相対的な天地ではない。

「新天新地が来る」

と、これはキリストが言っておられる。黙示録の最後だね。もうそういう終末の、歴史の終わりの最後の世界を私たちの現実として、私たちの信仰の中に受けとっていなかったら、力強い生き方はできません、窒息してしまうですよ。

●愛・恕・仁・大悲

日本はこの状態で行ったら、……それを除けようともしなければ、ふんぞり返って、どうして日本人というのは、自分さえよければいいような顔して、思いやりがないです、「恕」というものが。孔子に、ある弟子がいろいろ訊いた時に、

「あなたはいろんなことを知ってらっしゃいますね、いろんなことを求めていますね。そうでしょ」

と言ったら、孔子は、

「そうじゃない。一もってこれを貫く。私の求めているのはただ一つだ。それは恕である。本当に人を思いやるところの心である」

と言った。「恕」という。心の如し。一如の「如」という字は非常に深い。一如なる心だ。

「そのものと一如となる心」

が恕なんだ。キリストが思いやるというのは、その者と一如となってそいつを救い上げてしまうんだ、キリストは。

「憐れみは審判に打ち勝つ」

という。本当にそうです。

「神の愛しみはその人を悔改めに導く」

という。これはローマ書に書いてある。叱ってもダメなんだ、審いてもダメなんだ。むしろ引き受けたということ。

「ああ、引き受けてくれた！」

と、それで感激してぶっ倒れるんです。そういう魂は、これは何といっても、仁とか大慈大悲とか愛とかいう、そういう世界ですから。これはもう最後の世界です。やはり、私は

「大慈大悲」

なんていう言葉が好きだね。

エレミヤの心というのは結局、エレミヤが言うところの心とか腸の、その性格は何かというと、これなんです。愛とか恕とか仁とか大悲とかいうことです、心と言ったって心の性格は何かというと。

それだから、滅びを見るに耐えない。神さまに審かれるが、しょうがないなぁと。内村先生も烈しい怒りをもっていた。

「もうこんな国には愛想つかした」

なんてなことを言われる奥には、本当に日本を愛しておられたからです。

「二つのJを私は愛する。ジーザスとジャパンである」と言った。日本を愛するとならば、その角度からの愛だものね。だから、もう情けなくなるよ、見ていると。本当に生き生きとした顔がない。何か塞いだような顔して、何だかもう面白くないやつばっかりだ。結局、問題は心の問題になって、心の問題は要するに宗教心――一般的に言えば、信仰なんてことを言わなくても――これに目覚めないことには。

だから、私は「宗教と教育」という一文をこの頃書いて、学校の紀要に載っけてやろうと思う。私のは論文ではないですよ、エッセイだ。そんな――何というかね――接ぎ合わせたものではない。僕はいわゆる論文は書けないんだね、僕みたいなやつは。書いているうちに湧いてくるからしょうがない。参考書をたくさん散らばしておいて、結局読みはしない。読んでも大して面白くないし。しょうがないですね、これ。

私は学者でもなければ、教育家でもなければ、伝道者でもなければ、詩人というほどでもなければ、しょうがないね、この私は。いかなる範疇にも入らないようなダメな野郎だから。ところが、このダメな野郎を、あるひとつのダメでないものが捕まえていらっしゃる。だから、私は人に何と言われようと、一向にへこたれないんです、自分は何と言われようと。

このエレミヤは非常にエルサレムの将来を、「エレミヤ哀歌」みたいな現実になることを悲しんで、あるいは嘆いて、あるいはある意味において憤って、何とも言えない、泣くがごとく、怒るがごとく、嘆くがごとく、訴えるがごとく――頼山陽に、「雲か山か呉か越か」というような言葉があったね――そういう「雲か山か呉か越か」というような、分からない混沌たる状態に陥ってしまうというういうわけです。……

29節から31節は、たいぶエレミヤは観察がいろいろあるね。

30 滅ぼされたる者よ 汝何をなさんとするや 設令汝くれないの衣をき 金の飾物をもて身を粧い 目をぬりて大きくするとも 汝が身を粧うはいたずらなり 汝の恋人らは汝をいやしめ 汝のいのちを索むるなり 31 われ子をうむ婦のごとき声 首子をうむ者の苦しむがごとき声を聞く 是れシオンの女の声なり かれ自ら歎き 手をのべていう 嗚呼われは禍なるかな 我霊魂殺す者のために疲れはてぬ

そういう深刻な情景をまたそこに描き出しているわけです。町の中の特にそういった情景を描いている。

もう今日は、言うべきことはもう言ってしまった。さっきから言っている、その心の世界で、心は結局そういう深い、仁、愛、大悲という、そういう心が本当の心で、そうでない心は心とは言い難い。そしてその心は実は最も力強い。愛は最大の力を持っている。その愛の力の源泉はどうかというと、これは上からくる御霊。御霊そのものが愛の霊です。

これはこないだ『生命の光』の2号に手島君のことを書きながら言っているところです。まぁとにかく、手島君が「聖霊の愛」ということを言ったことは確かに画期的なことです。

私は内村先生からも、藤井先生からも、塚本先生からも、はっきりとしたそういった言葉を聴かなかった。それは何といってもそうです、御霊のこと。我々の心が本当に心である、その心の心たる一番の本質はこの御霊が来たときにです。「霊心」という言葉はないけれども――「心霊」はあるね、心霊ではダメだ――この御霊の心です。本来、御霊なんてことを言わなくても、心の一番深いところはそういう性格をもっている。それがはっきりこの祈りの世界で祈入していくと、この御霊の心が出てくる。「祈入」とはいい言葉だな、今日初めて使ったか何かしらんけれども。

●「宗教と教育」

私は、この「宗教と教育」を――これは全部まだ書いてない。お終いの方の一番大事なところはちょっとまだ――今晩書いてしまう。大体もうできているんだけれども、ちょっとあなた方に読んで聞かせる。〔註：著作集第一巻『無者キリスト』／無的実存／第六章「宗教と教育」に掲載〕

「20世紀はあと四半世紀をもって終ろうとしている。世界は今世紀において二つの世界大戦を爆発させた。そして現実がいつ第三次世界大戦を起こすやも知れぬ危機性を孕んでいないと誰が言えようか。世界の自然環境問題、地下資源問題、人口問題、経済問題、政治思想問題、等々の諸問題が相互に因果関係をなし、問題は錯綜して乱麻の如くである。この乱麻を断つ快刀はないものであろうか。そんな快刀は見当らぬであろう。否むしろ、乱れを解く糸口を個々人がさがして、自分の小世界で丹念に解きほぐすよりほかないのではないか。たといノストラダムスの預言の如き世界の終末が来ようとも。

文化文明は要するに人間のいとなみである。人間のいとなみである限り、人間そのものに、人間のいとなみのあらゆる問題の問題性がひそんでいるわけである。然らば諸々の問題の問題は、人間そのものを問うところに帰する。人間そのものの中心は、中心という言葉が表わしているように、中なる心である。「こころ」とか「たましい」とか「霊」とかいう言葉であらわされる人間の中心の問題は宗教的なものである。然らば、乱麻の糸口は人間のこころ、たましい、霊にあったといわねばならない。

この偉大な高度な科学の20世紀、原子力時代といわれる今世紀に、宗教をもち出すのは時代錯誤であるといって一笑に付する人があるならば、その人は人間性を失っているといわざるを得ない。実は宗教の世界にたましいの原始力があることを再発見しなければならないのである。

個人、社会、国家、国際、世界の諸問題中の問題は、帰するところ個人のたましいの在り方にあるとは、実は自明の理なのである。いかにしてこの個人を形成して、社会人たらしめ、国家人たらしめ、世界人たらしめるかに、家庭教育、学校教育、社会

教育という教育の課題があるわけである。

しかも、人間そのものの中心問題としてのたましいの問題が宗教に関わるものである以上、宗教と教育は実は不可離の関係にあり、且つ教育の根底に宗教を置かなければ、教育のまことの展開はあり得ないと思うわけである。

題して「宗教と教育」としたのは、叙上のような必然性に由るものである。しかし論者はいわゆる「宗教教育」を云々しようとしているのではない。また「宗教と教育」と申しても、ある特定の宗教に限るわけでもない。けれども真の宗教心は、ある宗教、乃至は宗教的なものを深く媒介としなければ、観念にすぎず、それでは教育の根底として自覚されるには至らないということも事実である。

然らば「宗教と教育」という主題において問われる対象は、教育をいとなむ主体たる家庭の両親と学園（保育園、幼稚園から大学に至るまで）の教員たるものの内的実存を中心とした問題であらねばならない。

「天よ耳を傾けよ、われ語らん、
地よわが口の言葉を聴け。
わが教えは雨の降るが如く
わが言は露のおくが如し。
細雨の若草の上にふるごとく、
霧雨の青草の上にくだるが如し。
愚かにして智慧なき民よ、
汝らが神に報ゆること此の如きか。
ヤハウェーは汝の父にして汝を贖い、
汝を創造し、汝を建て給いしに非ずや。
ヤハウェーの配分（わけまえ）はその民イスラエルにして
ヤコブはその産業（なりわい）なり。
ヤハウェーはこれを荒野の地に見、
これに獣の吼ゆる曠野に遇い、
囲みてこれをいたわり、
眼の珠（たま）の如くにこれを護り給えり。
鷲のその巣雛を喚び起こし、
その子の上に舞い翔けりゆくごとく、
ヤハウェーその羽を展べて彼らを載せ、
その翼をもてこれを負いたまえり」

これは旧約聖書申命記第32章に出ている所謂「モーセの歌」と称せられている詩の一部分である。この詩句からも察せられるように、イスラエル宗教の定礎者といわれ

るモーセは神の言を受けて、民に伝えているという自覚にあった。思索によって教を与えたのではなく、啓示に基づいて民に教を示した。それゆえに「わが教えは雨の降るが如く」という表現をおのずからとっているのである。モーセの十誡（本来は「十言」と訳すべき原語）も勿論、啓示の十言を基本としたものである。

さてイエスにおいて教説の事態はどうであったか。ヨハネ福音書にこう書いてある、

「祭〔過越の祭〕も半ばになってから、イエスは宮に上って教え始めた。すると、ユダヤ人たちは驚いて言った、『この人は学問をしたこともないのに、どうして律法の知識をもっているのだろう』。そこでイエスは彼らに答えて言った、『わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわしなさったかたの教である。神のみこころを行おうと思う者であれば、誰でも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわしたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りがない』」（ヨハネ7・14～18）

これがイエスの自覚であった。彼は自分を何ものともしなかった。福音書にしるされてある彼の教説はすべて天からの啓示で、神から聴いてつたえているにすぎなかった。彼は実に無教者であった。それゆえにこそ彼の教説に神的な権威があった。であるから、あの有名な「山上の垂訓」をイエスが語ったあとで、

「群衆はその教にひどく驚いた。それは律法学者たちのようにではなく、権威ある者らしく、教えたからである」（マタイ7・28、29）

と書いてある。イエスの教説がおよそけたはずれのものであったという証言は各福音書の諸所に記されてある。それはあたまからひねりだした理窟や理論ではなく、天来の啓示に基づく全存在的な告白であったからである。イエスにおいては教えるという意識よりも生きた真理を告白するというやむにやまれぬものであった。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

「われは世の光なり」

「われは門なり」

というような告白は、彼が聖意を一切として、自らを神の中に投身して、聖意を体現する実存であったからである。

周知の如くイエスは神をいつも「父」と呼んでいた。神を「父」と呼んでいた彼の自覚は自分がこの天界の、霊界の父の子であるということである。さきほどの「モーセの歌」においては、イスラエルの民族神ヤハウェーが民族の「父」として呼ばれ、イスラエルはその「子」として自覚されている。それゆえイエスにおいて、民族的な自覚から個的な自覚へと焦点してきたわけである。すなわち、神と人との関係を人間

界の親子の関係に類比し、質的には絶対とし、自覚されているわけである。それ故に、イエスの実存の性格は、正に神を父として敬愛し、信頼し抜いたところに在る。神はイエスにとってたましいの親であり、たましいの師であり、たましいの主であった。であるからイエスは神の子として、神の弟子として、神の僕として自らを自覚していた。これを宗教哲学的な角度から言うならば、人間は存在の質では、絶対者――それを宗教的な表現で、神、如来、ヤハウェー（実存者）、聖者、父、霊、アラー、天、何と名づけられようとも可い――と同質性なるものであり、使命の面では絶対者の聖旨、本願を体現すべき者、また本来体現し得る者なのである。

イエスにあっては、神を父とすることは、たましいの本質に即するものであった。それゆえ、万人のたましいは、キリスト教的に言えば神性を宿しているし、仏教的に表わせば、

「衆生悉く仏性あり」

といわれる如く、仏性をもっているというわけで、20世紀の人類の現実が、一般にいかに没宗教的であろうとも、人間はもともと宗教的存在であるということは、本質的にも歴史的にも否みがたき事実である。世界の精神史の底流をなすものは、キリスト教と仏教を二大宗教とする諸宗教の流れであることは否定できないおごそかな事実である。それだけに、没宗教、反宗教に人類一般が流れてゆくとするならば、人類は怖るべき破滅へと向わざるを得ない。

万人は救を要する。自分は救を要しない、と言う人があるならば、それはおそるべき驕慢であるか、精神異常かである、と言われても仕方があるまい。ところが驕慢にも救を要しないという心の傾きの人間が意外に多いのではないか。ダンテが、天国もこれを迎えず、地獄もこれを拒むたぐいの人間、すなわち、善を慕うのでもなく、悪を自覚するのでもない中間者流が地獄の門外に雲霞の如く蠢いている情景を描いて、

「憐憫も正義も彼らを蔑む」(Misericordia e girestizia li sdegna.)（『神曲』地獄篇第３歌第50行）

と喝破しているが、「救を要しない」という心根の驕慢者流もまた中間者流におとらず夥しいにちがいない。

ところで人が「神の似すがた」(Selem Elohim, Imago Dei, Ebenbild Gottes) に創造された（創世記1・27）という神話的表現の啓示は、人間が本来神性を宿しているということである。もし人間に神性がなければ、神を拝し、神を慕うということはあり得ない。

「我らの中に神の本来の力がないならば、
どうして神的なものに恍惚たり得るであろう」

"Läg, nicht in uns des Gottes eigne Kraft,
Wie könnt, uns Göttliches entzücken?"

とゲーテが言っている通りである。

「人」を「霊止（ひと）」と書いた古代人は真に「人」を自覚していたと思う。「ひと」を神霊の止まっている者と自覚したわけである。神性、仏性が存在の中心たるたましいの本質である、ということは、アウグスティヌスの『告白』の有名な言も反証している。すなわち、彼は神に向ってこう告白した、

「汝は我らを汝の為に創造し給うた。それ故、我らの心は汝の中に安ろうまでは平安でない」

たましいが、神仏と霊的に結ばれるまでは平安でない。「宗教」Religio ＜ re-ligare「再び結ぶ、結びかえす」ことを意味する動詞から来ているとするなら、まことに人間の現実に対する警告としても注目すべき言葉である。教育はドイツ語で Erziehung ＜ er-ziehen　すなわち「引き出してある状態に到らしめる」意味である。本来人間の中にある本質乃至天賦の才能を自覚させて、それを鍛えて円現させる、というのが教育の真義である。人間の内なる本質は、神性であり、仏性である。そういう宗教心に目覚ましめ、それと同時にその人の天賦のあるところに天職があることを自覚させ、その天賦を中心として自ら鍛えるように導くところに本当の人間形成の道があろう。

キリストが

「幼児の如くならなければ、天国に入れない」

と言ったのは、幼児に見えるあの純真な全的な信頼深さ。何か神的な、ほとけのような清純さ、天国的明朗な笑い。そこには天国の雰囲気が、極楽の霊気が漂うている。

「大人者不レ失二其赤子之心一者也」（大人（たいじん）は赤子（せきし）の心を失わず）

と孟子もいった。偉大な人物は童心を失わないのである。

幼児や児童の純な心を教育するにあたり、家庭の両親、学園の教育者が宗教心をもたないで、どうして本質的な育て方が可能であろうか。万人は本来宗教人なのである。しかしその万人の現実は本来のすがたから外れている。そこに万人は救を要するという事態が生じている。それゆえ、両親も教員もつねに新たに求道しつつ、救にあずかりつつ、教育にたずさわるところに教育の本然のすがたがあろう。

さて私は宗教は諸々の文化文明現象のどん底に位置するもの、または超越した謂わば絶対次元のもので諸々の文化文明現象の根拠であり、源泉であると見る。人間界を草木に譬えるならば、宗教はあたかも根の世界、道徳は幹の世界、諸文化文明は枝葉花果の世界である。すなわち教育も学問も政治も経済も農業も工業も商業も医業も諸々の職業も、それを営む主体が人間であるかぎり、宗教は次元がちがった世界であればこそ、却て最も深く文化文明に関わっているというべきものである。換言するならば、宗教は文化文明の価値体系において最も根源でなければならないと申すのである。世界的宗教哲学者パウル・ティリッヒも、

「宗教は人間の究極的関心事である」
といっている。

真善美の世界、すなわち学問、道徳、芸術の世界も、その根底的大前提たるものは宗教心である。深い思索と綿密な研究を要する学問も霊的な直観と洞察が欠けては究極の域に達し難い。道徳は実践的な原動力として、また道徳の究極の境地として宗教心を要する。芸術は技能の奥に宗教的情動を必要とすべく、霊的心境と共に神技に進みゆくものである。然らば学問、道徳、芸術の潜在勢力として、これらを展開しゆくものは宗教心であるといわねばならない。

教育一般は、徳育、智育、体育という広範囲にわたって関わっているのであるが、両親及び教育者自身が、今やいかにそのたましいの面で宗教的なるものに関わりをもって宗教心を自ら深め、これらの三面に自在に処し、創造的な展開をなすべきであるかは自明のことではないか。特定の宗教を信じるか信じないかは別問題であるが、人たるものは、たましいのある限り、宗教心を本具しているということを今こそ自覚すべきであると思う。

現代教育の諸問題の奥の唯一の問題性は、両親及び教育者自身のたましいがたましいの本質を宗教心として自覚し、具体的にその原始力を回復するか否かにかかっていると申したい。

そのためには、何か具体的な事象なり対象なりを通して、具体的に宗教体験をすることが肝要であろう。宗教心とか宗教的情操とかいっても、想像された程度では、具体的な力とはならない。信仰といっても観念的であっては、まことの生命力、創造力とはなり難い。今の一般のキリスト教徒、仏教徒の現実がこの程度のものが多いのは遺憾なことである。

孟子などは宗教家ではないが、
「万物皆備ワル二於我一ニ。（万物皆われに備わる）
反ミテレ身ニ而誠ナレバ楽シミ莫シレ大ナルハレ焉ヨリ。（身に反みて誠なれば、楽しみ焉より大なるは莫し）
強怒シテ而行フ求ムルコトレ仁ヲ莫シレ近キハレ焉ヨリ。」（強怒して行う、仁を求むること焉より近きは莫し）
と喝破しているあたり、既に宗教心と道念とが一如となっている素晴らしい心境であると思う。

さきにも触れたように、人間本来神性、仏性といわれる宗教性ある限り、学問的精進を無我の境地において追求する上においても、道徳的実践において愛がいかに宗教的な質をもったものであるかを体験することにおいても、芸術を愛好し、また追求するにあたり、いかに宗教的な深さが必要であるかを体感するにおいても、体育の面で

宗教的な心境における呼吸が技能を錬る上に大切であること、剣道、柔道、弓道、合気道、マラソン等々、神技といわれる境地がいかに宗教心に関わるかを思うにつけても、親も教育者もいかに宗教心ぬきには教育というものが、本質的には在り得ぬかを自覚しなければならない。

これに反して、現代人の意識は、主我的人間の自由とか要求とかを直接肯定して、そこに自主性とか主体性といったものを肯定しようとする傾向が強いと思われる。そのような角度の民主主義が肯定されているところに現代の危機性と諸々の混乱、行きづまりが生じている。そのような現象は要するにエゴイズムのさまざまな様相に他ならない。

カントもこの「自己（エゴ）との戦は最も困難な戦であり、自己に打ち克つは最美の勝利である」といっているが、そこに宗教的な力を要し、救を要する問題があるのであるが、その問題に深く立ち入ることは本論稿の主題ではないから、触れないことにするが、我執的な主我意識は、さきほどの驕慢に通ずるもので、その反対の心根は何を契機として生ずるかといえば、永遠、無限、無量なる絶対者に何らかの事象現象を通して出会うことである。そしてそこに生ずるのが畏敬の念であり、謙虚な平伏しの心の態勢であり、たましいの砕けの姿である。

ゲーテが長篇小説『ウイルヘルム・マイスターの遍歴時代』の第二巻第一章において、教育州での教育の基本として宗教的畏敬のことを述べているが、これは極めて注目すべきものである。この小説のこの個所でゲーテは「畏敬（エールフールヒト）」(Ehrfurcht)がすべての人に欠けている、といっている。

「ただ一つのものだけは生れながらにして持っている者は誰もありません。しかもそれは人間があらゆる方面にわたって人間であるためには、すべてがかかっている一点なのです」

という極めて著しい言葉を作中の人物をして語らしめている。本来あるべき畏敬の念が欠けているということは、言葉の深い意味で現代こそそうではないか。

畏敬にはまず三種類のものがあるとゲーテはいう。第一は我々の上なるものに対する畏敬、第二は我々と同等なるものへの畏敬、第三は我々の下なるものに対する畏敬の三種類をあげ、この三種類の畏敬が融合して一つの全体をなすとき、始めて最高の力と効能とを発揮する、といっている。それはどういう事態かというと、自己自身に対する畏敬である、と断じた。

それはどういう宗教事象であろうか。第一の上なるものへの畏敬は民族的宗教で、世界の諸々の民族の民族神がこれにあたる。第二の同等なるものへの畏敬は哲学的宗教で、哲学者はより高いものを自分まで引き下げ、より低いものを自分にまで引きあげ、

全人類との関係も自己と同等なものへの関係となし、個において宇宙を見るような洞察をなす汎神論的なものである。例えば

「仏道の身心は草木瓦礫なり、風雨水火なり」

とか

「一塵の中に大千の経巻あり」

とかいう道元禅師の心境はこの類いであろう。第三の下なるものへの畏敬はキリスト教において著しくあらわれているもので、

「これは人類が到達し得た、また到達せずにはいられなかった窮極のものです」

といっている。ゲーテは下なるものにおいて、「神の僕」として、おのれを「卑賤と貧困、嘲笑と侮蔑、恥辱と悲惨、苦悩と死」、然り、十字架の死にまで到らしめたイエスの実存、どん底の姿を意味していると思われる。彼は更に、「それのみか、罪悪と犯罪をさえ、聖なるものの障害ではなく、その促進として尊敬し、愛するにいたるまで」と、作中の人物をして極言せしめているのは、どういうことかと言うと、例えば「姦淫の女」（ヨハネ８・１～11）とか、一方の「十字架上の盗賊」（ルカ23・41～43）とかの砕けた心の消息を意味しているのであろう。

そして最後にこう語らしめている。

「……三つがいっしょになって初めて真の宗教が生み出されるのです。この三つの畏敬から最高の畏敬、すなわち自己自身に対する畏敬が生れます。そしてこの自己自身に対する畏敬から、また前の三つの畏敬が生育し、こうして人間は彼が到達しうる最高のものに達し、自分を神と自然とが生み出した最もすぐれたものと見なすことが許されるばかりか、うぬぼれと我欲によって再び卑俗なものへ引きおろされることなく、この高みにとどまりうるようになるのです」（ゲーテの言の引用たる「　」内の訳文は関泰祐訳による）

この「自己自身に対する畏敬」も実はキリストの福音がもっている。それは聖霊が宿ることによって、内なる神に対する畏敬となるからである。キリストの使徒たちが、使徒行伝においてこれを実証している。そこでは謙虚と権威とが相即している。性来の自我がぶっつぶれている我ならざる我、本然の我に対する畏敬となるのである。パウロが

「キリストわが内に、我れキリストの内に」

という一如の現実、そこに生ずる内なる我への畏敬が、ゲーテがここで語っている第四の畏敬の真意であると思われる。

ゲーテは神と自然と我という線を相関相入の角度で体感して生きていた人間であった。であるから、神的な、霊的な、生命的な神・自然が彼の中に、彼はまたその中に「生き動きまた在る」という消息を体認しつつ生きていた。その彼がこのように「自己自

身に対する畏敬」といったのは、正に彼自身の告白で、さすがにゲーテである。これは相対的自我的な自主とか自由とかいう消息とは凡そ次元のちがう消息である。

さて教育の面で一つとりあげたいのは、叙上の畏敬説の中で、第一の畏敬において、ゲーテはこう語らしめている。

「あの高いところにひとりの神がいて、その神が両親や先生や目上の人たちの姿をとって顕現している、と信ずることを子供たちに望むものなのです」

と。すなわちこの場合、両親や先生たちは、宗教的な実存を身証していなければならないわけである。神がイエスにおいて自現し、イエスは神を体現したから、イエスは

「われを見し者は父を見しなり」

と告白し得た。そのような内実として、イエス以外の人間が神を体現することはあり得ない。我々は皆、救を要する人間であるから。けれどもゲーテは、ここでは、とにかく両親や先生たちが、宗教心乃至信仰をもって生き、神的な権威を何となく備えていなければ、本質的な教育は在り得ないことを暗示しているのである。これは我々の現実問題として確かと自覚しなければならぬ重要なポイントである。両親も教育者もそういった宗教的な権威を具えていないために、自信を失っているのが一般ではなかろうか。

家庭の教育者たる両親も、学校の教育者も、絶対者に対する畏敬と信愛からこそ、まことの自主性も自由も権威も生ずるのであり、教育の根本姿勢はそこにあることに思いを致すべきである。そうでないと、子らに、生徒たちに真の謙虚さと真の自律も自主も自由も身につけさせることができない。いたずらに民主主義を翳（かざ）すべからずである。

モーセの十言（誡）の第五言「汝の父母を敬え」も畏敬の観念を貴ぶところから発想されているわけであるが、現代の家庭においてこの姿勢が崩れているのが一般であるのは、民主主義の自由平等をはきちがえているからである。神仏と人間との関係において、人間は神仏を畏敬すべきは霊的な法（ダルマ）として当然なことである。そして神仏と個々人との関係は夫々絶対関係であって、比較をゆるさぬものである。そのような絶対者を基盤とするところに人格の尊厳と自由と平等がある。民主主義とはそのような基盤においてはじめて健全なものであって、このことと人間界の有機体的な秩序とは矛盾するものではない。

親子、兄弟、姉妹、師弟、先輩後輩、社会的諸団体等々には、人格的信愛を血肉とし、構成、組織等々を骨格とした秩序と役割があることは、あたかも人体が、首、胴体、手脚等をもった有機体として秩序と夫々の役割があるのと同様である。このことは使徒パウロがコリント前書一二章で申している通りである。

神仏に対する絶対的な畏敬と信愛の縦の関係あって、始めて人間間の相対的な畏敬

と信愛の横の関係が健全に成り立ってゆくことは天地の道理である。

「神の親心、人間の子心。
君主の親心、市民の子心。
あらゆる恵福の源泉」

"Vatersinn Gottes; Kindersinn der Menschen,
Vatersinn des Fürsten; Kindersinn der Bürger,
Quellen aller Glückseligkeit."

これはスイスの世界的教育家ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi 1746～1827）の『隠者の黄昏』（"Die Abendstunde eines Einsiedlers"）の冒頭に掲げられている標語である。

この標語の二番目の「君主の親心、市民の子心」は封建社会、君主政体を背景とした言葉であって、現代とは趣きを異にする旧体制ではあるが、あのフリードリヒ大王の如きは、正に「君主の親心」を有っていた名君であった。しかし現代でこの語を活かすとすれば、君主の代りに首相というべきであろうし、また凡そ社会的団体の長にあてはまる言である。

ともあれ、家庭における親心・子心は、何といっても血のつながりから来る最も自然な親密な関係における心の在り方である。親が子を正しく愛し信じて育てる。子は親を敬し信頼して仕える。そのような相互の心根が親心・子心といわれる内容であろう。その宗教的根拠はキリスト教が最もよく具現している。イエスが神を「父」と呼び、自分を「子」として自覚していたあの在り方が示しているからである。東洋においては孔孟のおしえが孝道としてつたえている通りである。

学校教育においても同じく先生の正しい愛に対して生徒の尊敬と信頼とが応ずるところに美しい師弟関係がある。そして師弟関係の正しさ美しさというものの根拠となるものは、先生たる教育者の内的実存、心の在り方にある。端的に申してそれは宗教心に根ざした愛である。

宗教の世界は理屈ではない、観念ではない、解釈ではない、説教ですらない。それは霊感であり、体感であり、体現であり、告白である。高次な教育もまた単なる説明ではない。説諭ではない、教訓でもない。さきにも触れたように、両親や教育者自身の在り方を以て、言動を以て、生徒におのずから悟らしめ、且つ生徒の中にあるものを「引き出し」、育て、やがて生徒自らが創造的なたましいとなるように導き且つ鍛えることである。

そのためには昔の塾的な教育体制が最適と思われるが、少なくとも学校において塾的精神が生かされることを要する。布が縦糸と横糸で織りなされているように、義と愛とが渾然と自在にふくまれている両親及び教育者の教育精神が極めて大切であると

思う。イエスは神を父と呼び、また霊として自覚していた（ヨハネ4・21～26参照）。父神は人格神として、霊神として不可離の存在である。このように神を拝していたイエスは正に人格的霊的な主体として神を拝していた。それゆえ、イエス自身が特別な霊的人格であった。霊的人格！　今の世に最も必要としているものは霊的人格である。これは宗教心を本当にもてば、誰でもが成り得る実存態である。両親も教育者もこの質を必要とする。しかもその霊的人格の本質は何か。一言でいうならば、それは愛である。仁である。恕である。慈悲である。

孔子が曾子に

「吾道一以テ貫クレ之ヲ」（吾が道は一以て之を貫く）

と言った。孔子が外出したあとで門人が曾子にあれはいったいどういう意味かと尋ねたら、曾子が

「夫子之道、忠恕而已矣」（夫子の道は忠恕のみ）

と答えた、とある。すなわち孔子の一貫した道はまごころをもった思い遣りであるのだ、との意である。謂わばこれがまた仁に通じているわけである。今の世は何と自分勝手の傾向の強い「自主」だとか「民主」だとか「平和」だとかいうお題目が横行していることか。責任や自律の精神がなくて何の自主や自由があろうか。神仏に托身してこそ臨み来る平安である。これなくして、何の平和があろうか。孟子の

「仁也者人也」（仁は人なり）

の一言は千古の名言である。仁は人の本来の性であるというのである。この仁の喪失に、人間界の不和闘争のさまざまな思わしからぬ現象が生じているわけである。20世紀の危機も要するにここにある。

キリスト教の贖罪愛、仏教の大慈大悲、儒教の仁、恕、要するに愛、人を助け、人をゆるし、人を担う角度の心根とその実践、これが愛である。愛の宗教論をここに展開しようとは思わないが、教育の始めにして終りなるもの、アルパにしてオメガなるものは、愛である。愛が最強の力であり、人間形成の窮極の目的であるからである。

ダンテが『神曲』の最後で

「さりながらわが願望と意志とは、
さながら等しく廻る輪の如く、
太陽と諸星を廻らす愛がこれを動かしていた」

と詠って、愛が宇宙の原動力であることを告げている。」

〔註〕本稿「宗教と教育」の原型は一九七三年度、独協中学・高等学校『研究紀要』創刊号巻頭。